2015年度　帰国隊員/青年支援プロジェクト　実施報告書　　提出日　2016年8月8日		
氏名：　東村まゆみ	実施国：モンゴル	協力活動

活動名称	モンゴル西部地域　障害児の為のシーティングセミナー
実施期間	平成27年7月27日～平成28年6月30日

（1）申請した動機

モンゴルの医療水準は高いとは言えず、また妊娠・出産の管理も非常に不十分である。これらの問題も大いに関連があると思われるが、障害児の割合が日本などと比較して多いという。

更に国の財政難により福祉制度はあっても各地にある障害児支援団体への活動費用の支払いが滞る事もあり、現場の障害児は十分なサービスを受ける事ができない状態に陥っている。特に首都から遠く離れた場所では顕著である。

主にモンゴル西部地区のバヤンウルギー県にて障害児支援の活動をしている友人よりこういった現地の障害児の置かれている環境や抱える問題等様々な情報を得て把握していた為、青年海外協力隊の活動を終えた今、自分の途上国での障害児支援の経験を是非役立ててみたいと考えた。

現地の障害児の抱える問題の一つに深刻な福祉用具の不足が挙げられるが、不足している代表的なものとして車椅子がある。必要とする子供は非常に多いが、モンゴル国内で小児用の車椅子の生産はされておらず輸入するしか無いが、購入資金も無いため海外からの寄付に頼っているのが現状である。しかし、各児の身体に全く合わない大きさのものを寄付される事も多く、結局使用出来ていないという場合もあり、多くの移動に問題のある障害児は自宅で寝たきりの生活をせざるを得なくなっている。

私はタイでの青年海外協力隊の活動の中で特に障害児への車椅子のシーティングに関して力を入れて活動した。タイでも似たような問題を抱え、使用出来ずにいた車椅子を現地で手に入る材料を用いて子供に合わせて調整して使用を可能にする、そしてその技術や知識を現地の人に身につけてもらう、という活動を実施した。特に活動後半の1年は日本車椅子シーティング協会の国際部と連携し、シーティングプロジェクトを立ち上げて配属先において2度ワークショップを開催した。こういったタイでの経験や得た知識や技術がこのモンゴル西部地区において非常に活かせるのではないか、と考え活動を希望した。

（2）活動内容概要

【活動目的】

・障害児に関わる職種や保護者などの障害児の寝たきりの弊害と座る必要性への理解を深める。そして障害児支援の必要性を感じてもらう
・障害児に関わる職種や保護者などに対する車椅子やバギーの調整技術の指導、助言、提案
・障害児(特に重度の障害児)が使用可能な中古車椅子・中古バギーの提供
・障害児の社会参加促進
・子どもの医療に携わる医師に対する保健教育

【活動内容】

2015年

7月27日～　・ウランバートルにて日本人スタッフと共に現場視察
→障害児親の会(ウランバートル)、障害者支援団体数カ所訪問

8月1日～3日　・バスでウランバートルからウルギーへ移動

8月4日～20日　・バヤンウルギー県障害児センター施設長からバヤンウルギーの障害児に関する情報収集、障害児センターにて障害児やスタッフへ直接指導・アドバイス、また地域に住む障害児の元を訪ねて本人や環境などの現状把握やニーズ把握の為の調査実施

・ウルギーの人々との交流（関係づくり）
8月中旬～　・現地の日本人スタッフと次回ワークショップや更に今後の方向性についての話し合い
・日本の車いす工房の技術者さんへバギー提供についての協力要請と第1次ミーティング
10月中旬　・現地の日本人スタッフと今後についての話し合い。
・ウルギー支援のためのNPO設立、ホームページ作成
（地域の障害児への支援活動の為の資金作りなど）
11月～　・車椅子輸送の段取り確認、車椅子のメンテナンス依頼、
2016年1月　・車椅子工房の技術者とのミーティング、
・ワークショップ時の対象児の選定（現地スタッフ中心に）
1月～2月　・現地スタッフによる対象児の身体計測依頼、ニーズなどの調査（測定方法の指導）
・車椅子・バギーの具体的な輸送準備、車椅子工房の技術者とのミーティング
3月下旬～5月　・車椅子・バギーを船便でウルギーへ輸送（車椅子技術者・輸送業者・モンゴル国内で輸送を手伝ってくださる方々との打ち合わせ）
5月13日～14日　モンゴル・ウルギー訪問
5月14日～15日　ウルギーの地域に暮らす障害児宅訪問（車椅子のフィッティングや相談など）
＊添付資料1
5月15日～16日　ウルギーの保健省にてワークショップ（2日間）開催　＊添付資料2
テーマ　1日目：①肺炎について（タイプ・予防法など）
②おもちゃで育てる（重度障害児）
2日目：①座らせてみよう　＊添付資料3
②脳性まひ・発達遅滞の予防について＊添付資料4
5月14日～16日　現地スタッフとのミーティング（今後の活動について）
5月17日　帰国
5月17日～現在　インターネットを活用し、ワークショップ後のフォロー、
今後の活動に向けての話し合い等　＊添付資料5

（3）活動の成果・苦労した点・反省点等

【成果】
（1）ワークショップへ高い関心を持って現地の若手の医師などが大勢参加してくれた
現地の医療・福祉レベルは非常に低く、最初の訪問時にはそのマイナス面にばかり視線が行っていたが、今回のワークショップを通し、とても意欲のある若い医師等が多くいることを知る事が出来た。
ワークショップでは非常に熱心に参加してくれている医師もおり、ワークショップ後に現地の中心的に活動してくれているスタッフ達とやる気のある医師が活動後もタッグを組んで地域の障害児のサポートをしてくれていると聞いて、期待をはるかに超えた良い変化が生まれたことに驚きと喜びを感じている。

（2）現地でサポートしてくれた方々がこのプロジェクトを通して地域の障害児支援へ高い関心を示し、ワークショップ後も自分たちで試行錯誤しながら精力的に活動を続けてくれている。ワークショップをきっかけに気持ちのある人たちの結びつきを作ることが出来、チームが出来た。ワークショップ後に自主的に今回訪問した障害児の家に再度訪問したりし、自主的に活動を継続してくれている。

（3）ワークショップ後、現地でサポートしてくれた方々によってNGOが設立した。日本側でもNGOを昨年作ったが、現地にNGOがあると今後連携して活動しやすくなると考えられる。

（4）今回のワークショップで車椅子を得た事で一人の子供の生活が激変した。

4 歳で突然歩けなくなった 10 歳の少年。彼の家も両親ともに無職で非常に貧しい。車椅子を手に入れることは難しくその為彼は 4 歳から殆ど家から出ることが出来ない生活を余儀なくされた。学校にももちろん行っていない。しかし体にピッタリ合った車いすを得た事ですぐに外出が可能となった。現在は新年度から学校に通えるように学校側と前向きな話し合いを行っている最中である。これらの一連の変化は効果が分かりやすい事もあってか現地の人々にとって衝撃的な変化だったようで、ワークショップ後も現地スタッフが時々訪問して関わりを持ち続けて変化を見に行ってくれているようである。

（5）ワークショップの開催にあたり、車椅子を提供して車椅子工房の方々はもちろんの事、友人や知り合いなどに広く呼び掛けて障害児の使用できる要らなくなったおもちゃを沢山集めたり、仕事で関わりのある福祉用具の会社に依頼して車椅子のクッションを寄付してもらったりし、それにより多くの人々にこのプロジェクトに関わってもらうことが出来た。今回寄付していただいたものは現地で非常に喜ばれ、写真付きで寄付してくださった方々にワークショップ終了後にお礼と報告をすると、皆一様に「役に立ててうれしい」と喜んでくれた。私の活動を通して遠く離れたこの地にこのような困った状況で暮らしている人々が大勢いる事を知ってもらうことが出来た事、また国際支援の機会を身近に持ってもらい、関心を持ってもらうことが出来た事はとても良かった。

【苦労した点】
　現地の人々や協力してくれている日本人（現地に長期滞在し活動中）が何事にもルーズであったためにかなり苦労した。現地で活動している時もなかなか物事が進まなかったが、日本に帰国してから日本とモンゴルで遠く離れた環境でのやり取りが難しい点である。ネット環境が十分に整備されていないという事と性格的な問題だと感じている。
また『計画』や『約束』にあまり意味がなく、事前に何度も話をして了承を得ても当日どうなるか分からない、という事があり、限られた現地滞在時間で出来るだけ良い効果を出すために色々な準備をして臨んだ。
　限られた時間の中で、日本でも非常に慌ただしい仕事を抱えながらの取り組みだったため、精神面でかなりストレスを感じた。

【今回学んだこと】
　現地の方々を巻き込んだ活動にはある程度の期間をかけ、顔見知りになり、まずは一緒にご飯を食べたり何気ない話をしたり遊びに行ったりし、多くの時間を共にして、まずは仲良くなって私自身を知ってもらい、仲間と認めてもらう事が非常に大切だという事である。言葉も習慣も何もかも違う見知らぬ土地で彼らを尊重して積極的に関わる事は出来るのは協力隊時代の経験が非常に生かされた場面であった。
今回のような非常に貧しい地域では個人のみならず行政等も含めどこにもお金が無い為、色々な事が滞っている。その為今回のように助成金を得て活動出来た事で、現地の人々から大変に喜ばれた。やはりある程度資金が無いと何も始まらない。今後は継続的な活動が行えるための資金作り（自分たちで）の部分について支援していく予定である。

（4）今後のプラン

　今後は日本・モンゴル双方の NGO で密に連携をはかり、現地の活動の支援をしていく。具体的には現地のスタッフの活動に対する相談や助言、物資などの支援活動をしていく。また現地の活動費用を得るために障害児の家族、障害者が収入を得られる手段を一緒に模索していきたいと考えている。
※7 月の中旬に日本のぬいぐるみ寄付団体にお願いをしてぬいぐるみを沢山寄付していただき、現地に届けた。今回も現地スタッフが精力的に地域の障害児のところに精力的に訪問して配布してくれた。非常に喜ばれた、との事であり、詳細な報告も受けている。また現地スタッフを今年 10 月に日本に招いて日本の現場の視察などを計画している。今後より深い関係を気づきながらお互いに協力をしあってより良い支援活動をしていきたい。